

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4360290003		
法人名	有限会社あい		
事業所名	グループホームあい		
所在地	熊本県八代市島田町863-3		
自己評価作成日	平成23年9月29日	評価結果市町村受理日	平成23年11月21日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.in/kaigosin/infomationPublic.do?JCD=4360290003&amp;SCD=320">http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.in/kaigosin/infomationPublic.do?JCD=4360290003&amp;SCD=320</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市水前寺6丁目41-5		
訪問調査日	平成23年10月14日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・その人の全てを丸ごと受け入れるという気持ちで日々の支援にあたっています。  
 ・ご家族との信頼関係を大切に、要望や意見をいやすい雰囲気づくりを心がけています。  
 ・一つ一つのことを本人、家族とホーム側で一緒に考え、大きな家族となれるよう、心と心でのかわわりを大切にしています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

理念に基づいて、年度毎に介護目標を掲げ、職員に具体的な行動・対応を示し廊下に掲示して共有している。職員が目指すもの・学びたいものを自主的に設定し、達成するための研修プログラムが作成され、一人ひとりのレベル・職種・職位に応じた研修計画も立てられており、人材育成への意欲が感じられる。利用者・家族・職員間の距離が近い。いつでも自由に出入りし、食事時間になると面会に来ていた家族も一緒に食事をし、問題があったら共に考え、やってみる、大きな家族となっている。今年6月から、地域交流を促進するため「さくら会」の活動を開始し、毎月3回、地域住民を公民館に招いてラジオ体操・七夕祭り・スイカ割など楽しい行事を開催したり、地域包括支援センター職員の協力により、「夏バテ予防」の講話をするなど、地域への貢献を積極的に行なっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	会社としての理念、事業所としての理念があり、年に一度の全体集会及び会社内の勉強会などで定期的に振り返り、理念の共有を行っている	「ゆっくり一緒に楽しみながら」「私のままで暮らせる」を大切にしたい理念に基き、年度毎に介護目標を設定し、職員の行動指針として、理念の実践を図っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会、老人会に加入している。毎月老人会の定例会では血圧測定を行い、町内、校区の行事への参加を行っている。昨年11月は秋祭りをし、地域の方々やボランティアの参加をいただいた	「地域に感謝したい」という施設長の思いを町内会長に相談し、公民館使用の許可を得てふれあい事業「さくら会」が今年6月から毎月3回開催されている。初回はふれあい会の名前を参加者と一緒「さくら会」と決定し、ラジオ体操で体をほぐしたり、もっと住みよいまちづくりを考えたり、郷土料理を作ったり、スイカ割に挑戦したり、隣接するデイ職員と協力し多彩なプログラムを提供している。希望者には送迎も行い、地域の人々との交流に努めており、地域貢献への意気込みが感じられた。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	今年から地域の方と一緒にふれあい事業を実施している。隣接のデイサービスを事務局とし、事業が根付くよう支援をしている		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ホームからの報告だけでなく、委員の方からも意見を出してもらっている。近年では意見や質問も活発化している。本年度は事業所の敬老会に委員の方を呼ぶ計画をしている	家族会会長・町内会会長・老人会長・民生児童員・地域包括支援センター・市高齢者支援課・入居者代表・家族代表等の参加を得て会議が開催されている。ホーム側から活動内容・入居者状況・ふれあい事業・事故や苦情等について報告があり、その後意見交換を実施。会議はホーム二階の会議室で行われているが、これまで委員と利用者が接する機会が少なかったことを考慮し、敬老会に委員を招待。利用者と職員も同席して食事をするなど、交流の機会を作り、委員の状況把握を支援する努力も見られた。	意見交換会では、運営上の勘案事項等を議題として取り上げ、検討することで、より効果的な運営推進会議になると期待できる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	連絡を密に取るようにしている。事業所の実情も積極的に伝えるようにしており、本年度は2件目(開設から)の苦情も報告した。	家族からの相談ごとあえて苦情として取り扱い、市に報告するなどホームのサービス向上への積極的な姿勢が伺われた。地域包括支援センターとの交流はあるものの、市から事業所への積極的な関与はあまり感じられなかった。避難訓練中、車椅子が線路に挟まるというハプニングが起きたこと、その後のJRや市役所への問い合わせの結果等は運営推進会議で報告されているが、改善策を見出すまでには至っていない。ホームだけでは解決できない課題には、行政の継続的な支援を期待したい。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員全体が具体的な行為を理解しているかの確認は出来ていないが、研修や勉強会をおこなっている。身体拘束を行わないことを前提としてケアを行っている	「家族から、西日の当たる場所に長時間座っている利用者の背中が暑くなってる」という指摘を受け、動けない人への対応について早速勉強会を実施。自分で表現することができない利用者への対応は気づかないうちに拘束となっていないか、家族の指摘を気づきや改善のチャンスと捉える等、拘束のないケアへの積極的な取り組みがみられた。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修や勉強会で共有をしている。実習受け入れなども活用し、第三者の目で気づいた点を言ってもらうことでも振り返りの機会となっている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部研修の参加、社内での勉強会をおこなっているが、個々の必要性の話し合いや活用まで至っていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時、改定時には当ホームのケアの考えや看取りに対する考え方を契約時に説明を行い同意を得ている。又、説明が必要と思われる所は家族会などで、再度おこなっている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時や家族会などで意見や要望を聞いている。本年度は家族からの要望を苦情として取り上げさせてもらい、市への報告をおこなった。	入所者の看取りが行なわれた後、家族の自主的な提案から家族会が結成され、年に4回家族だけで食事をとりながら意見交換を行ない、家族の要望を取りまとめた後、ホーム側が参加し、家族会の中で話し合いを行っている。また、家族会の要望に応じて、施設長が認知症・熱中症等に関して勉強会も行なっている。	自己評価の目的・外部評価の活用等についても家族会に説明し、ホームの目指すケア・職員のガンバリ等について披露されることも良いかと思われる。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	現場ではその都度職員からの意見が言えるよう環境づくりをしている。運営会議などの中で話し合っている。	担当制を取り入れ、担当職員が、「その利用者を一番良く知っている」という前提で、担当者の提案を重視し、「とりあえずやってみよう」の肯定的な姿勢で積極的な提案を促し、運営に反映していた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個々の努力、実績の評価のために課業を作成中。個人面接などを通し、各自の向上心につながるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	教育担当者が教育プログラムを作成し、個々の目標に応じて法人内外の研修を受けるようにしている。実践者研修、リーダー研修も受けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	GH八代連絡会でのネットワークが出来ている。当ホームへの研修受け入れの機会はあるが、こちらからの訪問は出来ていない。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	相談の時点で困っている事、不安な事、要望は時間をかけて聞くようにしている。入居時訪問などを通して、本人と話す時間を多くつくるようにして思いを知る努力をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	相談の時点で困っていることや要望をじっくり時間をかけて聞き、思いを受け止めるようにしている。複数回時間をとり関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	当ホームを利用できない方でも相談の時間をじっくり作り、本人やその家族に必要なサービスが利用できるよう支援している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	大家族の一員のように笑ったり、泣いたり、怒ったり、その時々を共有している。職員が利用者にとくさんのことを教えてもらっているが、介護をしてあげるとい場面も見られる。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	何においても家族への報告や相談を欠かさないように努めている。家族と一緒に考え、共に支えあえるよう情報を共有している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の状況に応じて安心できる場所へ行ったり、自宅への訪問もしている。定期的に自宅で一泊する方や、面会も家族に限らず、知人などもある。	利用者にとって「安心できる場所」の提供を大切にしている。自宅で家族と過ごしたり、空き家になった自宅の草むしりに出掛け近所の人のおしゃべりを楽しんだり、表現できない人は、ドライブで故郷の景色や空気を感じてもらう等の対応が取られている。また、好きなパチンコに行ったり、スタッフと2人だけでゆっくり過ごす等、一人ひとりの思いに沿った安心を提供し支援している様子が伺えた。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士がその時々で関わりながら協力し合うこともみられる。職員はなるべく見守るようにしており、状況に応じて関わっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後も自宅への訪問、病院への面会、又家族に対する相談援助などの関わりがっている。家族のホームへの訪問も続いている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の言葉や表情、家族からの情報をもとに、本人の気持ちに添えるよう努めているが、職員間の共有や、利用者の立場でかんがえることの難しさはある。	介護度4が2人、5が4人とレベルが高い人も多く、意向の把握に苦労が見られた。介護記録に、利用者の言葉をできる限り、そのまま細かく記録し、職員間で共有し、思いを引き出すヒントにする努力をしていた。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	担当職員が本人や家族との関係を築いていきながら、生活歴やなじみの暮らし方などの把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者との毎日の関わりの中でみられる小さな気づきを職員同士で共有できるよう情報交換を常におこなっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成担当者を中心に、本人や家族、ケア担当者の意見を聞きながら、ケアプランへ反映させている。	「ケアマネジメントとは何か」ケアの基本に立ち返り、家族計画ではなく、本人主体の計画を立てることを大切にしている。「その人らしい生活」を維持するために、本人の意向や生活歴を知り、家族からの情報等を参考に、管理者と看護師でもある計画作成担当者を中心にプランを作成し、モニタリングを行い評価につなげ、状況に応じて変更している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員は業務開始前に個人記録、連絡ノート等を読み、情報を共有している。疑問点は確認をおこなったうえでケアにあたっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者が隣接のデイサービスへお茶をしに行ったり、地域の老人会やふれあい事業に参加したりしている。自宅で過ごすための送迎支援の要望も家族から出てきている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	町内会や老人会への加入で地域との交流は次第に深まってきており、近所の方の誘いを受け野菜を収穫することや、利用者の自宅の梅をちぎりにいき、梅干を漬けたりしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医への相談や情報交換をおこなうことが出来ている。家族だけでの受診が難しい場合はホーム職員も同行するなど、適切な医療が受けられるよう努めている。	かかりつけ医受診は家族同行を基本としているが、不安を持つ家族には職員も同行している。月1回の協力医往診前に、ドクターからの問合せに利用者の状況等を報告し、適切な医療が受けられるように支援している。また、ホームには2人の看護師がおり、利用者や職員の安心に繋がっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は日々気づいたことを看護師へ相談・報告しているため、早期発見につながり適切な受診や治療がおこなわれている。併設の訪問看護ステーションが週に一度健康チェックもおこなっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	認知症の理解があつての入院受け入れは困難な場合が多いため、家族の意向を確認し、担当医への相談をおこなっている。家族や担当医と相談を重ね、なるべく早期退院ができるよう働きかけている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	希望があれば看取りをおこなうことを契約時に説明し、同意を得ている。看取りに入る前に家族と職員間で話し合いをおこない、家族の要望を十分に聞き看取りケアへ入っている。	入所時に看取りに関する指針を説明し、希望に沿った対応が可能であることを伝えている。吸引が必要な状態、人口肛門の人等、終末期は、医療的な処置も必要となり、その都度職員研修を行いながら、必要な際は、行政の許可を得るなど、一つ一つのハードルを乗り越え、看取りケアを行なっている。家族から心のこもった感謝状が送られており、家族と職員が一体となって看取りを行った結果、温かい達成感を共有している様子が伺われた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	社内で勉強会をおこなっているが、全ての職員が急変や事故時に対応できる実践力を身に付けているかは確認できていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署の協力により本年度は地震を想定して訓練をおこなった。避難場所へ実際車椅子で行ったこともあり、災害時の避難の難しさを職員も体感している。運営推進会議の中でも報告やアドバイスをもらい対策を考えている。	ホームと指定された緊急時避難場所間に線路があり、移動訓練時に車椅子が線路に挟まったというハプニングが起きている。線路を通らずに避難できる場所の確保、また、緊急時通報先として、自治会長や消防隊、近隣住民の支援を依頼するなど、運営推進会議で検討し、早急な改善が必要と思われた。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	その人を尊重した言葉遣いが出来るよう、勉強会や実践の場で指導をしているが、まだ十分とはいえない。	排泄誘導のことは掛けや、排泄時を見守るドアの隙間加減に配慮したり、職員の立ち位地など、職員目線ではなく、利用者尊重を意識した対応を、グループワークで勉強しながら、改善に向けた対応に努めている。訪問当日、排泄誘導が難しい入所者のために、職員は交代しながら、さりげなくゲームのように楽しそうにトイレ誘導を試み、排泄自立を支援していた。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	希望が表出できる方に対しては、希望時に外出などは出来ている。うまく表現が出来ない方に対しても情報をもとにケアプランの中に入れて本人に聞くことを心がけて対応しているが、十分とはいえない。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人のその時の気持ちを大切にしようと努めてはいるが、その日の職員体制などで希望を聞くことや添えないことがある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ホーム内でのおしゃれは出来ていないことが多いが、身だしなみは心がけて支援している。又、外出時は家族が選んだり、本人が選んだりしておしゃれをしている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	料理の盛り付けや味見などスタッフと利用者で相談しながらやることは多いが、それを出る利用者は少ない。又、重度化のため、キザミやミキサー食の方も食事を楽しむことが出来ているか疑問。	「その人が気持ちよく、穏やかに食事ができること」が一番大切にしている。食事の時間や場所、一緒に食べる相手など、利用者の表情を汲み取り、食事が楽しめる支援が工夫されていた。	嚥下困難な人でも、回転すしでは旺盛な食欲を発揮したり、ビールを勢いよく飲んだケースが報告されており、再度、好きな物や、食べたいものを聞き出すための工夫を期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	それぞれの職員が食事や水分の観察は出来ている。その人の状態に応じての支援に努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床時や毎食後の口腔ケアをおこなっている。毎週一度歯科往診があり、そのときアドバイスや指導をもらっている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンに応じてトイレへの誘導を行い、日中トイレで排泄してもらえよう、努めている。夜間以外はオムツをはめないよう支援している。	入居時は寝たきりで、オムツ使用だった利用者の排泄パターンを細かく観察し、トイレ誘導をこまめに行った結果、日中のオムツの利用者がいなくなったという。重度の利用者にもトイレでの自立した排泄を支援しており、職員の忍耐強い応援の姿勢が伺われた。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	一人ひとりに合わせた下剤の調整や、なかなか水分が摂れない人へはゼリー状にしたり、工夫をしている。好みや習慣に合わせた支援や、朝カスピ海ヨーグルトを食べてもらっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	大まかな入浴予定者はその日で決めてはいるが、本人の状態に応じ柔軟な対応に努めている。その人の気持ちにあわせ、時間も出来る限り決めずに合わせている。	1日おきに週3回のペースでの入浴となっているが、希望者は毎日でも可。湯は個別に入れ替えられ、新しい湯で気持ちよい入浴が支援されている。入浴嫌いの人には、足浴も取り入れる工夫がみられた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	状況に応じて日中でも安心して休めるように支援している。夜間の入床時間や場所も柔軟に対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服用薬品名シートをファイルにまとめてあり、職員がいつでも確認できるようにしている。一人ひとりの職員が目的や副作用などの理解について十分でないと感じている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の生活歴や、今までの家庭や仕事での役割りを日々の生活の中で発揮できるような支援に努めているが、十分でないところもある。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	散歩、買い物ぐらいが日常的な外出となっているが、その日の本人の希望にあわせることが出来ないこともある。家族協力のもとでの外泊や、職員と利用者でパチンコへ行くなどはしているが、全ての利用者の方への支援にはなっていない。	利用者の重度化もあり、日常的な外出は、散歩・食材購入・コインランドリー・受診のためなどに限られているように伺えた。利用者家族には外出を好まない意見も聞かれるようだが、一人ひとりの思いの把握や、状況に配慮した気分転換への支援は、入居者にとって良いと思われた。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	外出時本人へ財布を渡し支払いが出来るよう支援しているが、だんだん自分で使うことが難しくなっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自らが電話をしたり、手紙を書くことは難しいが、家族から送られてくる手紙を見たり、かかってきた電話で話をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	台所での食事作りの音やにおい、季節の野菜、花などで、生活感や季節感を感じてもらえる空間作りをしている。	日中は、殆どの利用者がリビングで過ごしているが、重度化と共に椅子利用が多くなり、畳敷きの談話室にもソファを持ち込み対応している。あまり広くないリビングに座って、洗濯物を干したり、食事の仕度に取り組む職員の様子を眺め、ペットの猫に声かけたり、テレビを見る等、自由な過ごし方・暖かみのある家庭的な雰囲気作りとなっていた。	廊下やリビングに不要となった椅子も配置されているが、少し整理してみるのも良いかと思われた。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	談話室、廊下、リビング、縁側など、思い思いに過ごせる場所がある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族と相談しながら馴染みのものや好みのもを用い、本人にとっての居心地のよい空間作りに努めている。	家族やペットの写真・ぬいぐるみ・使いなれた筆筒が置かれた部屋、家族面会時に一緒に食事をとるためのテーブルが持ち込まれている部屋、大きなソファと整理筆筒だけのスッキリ片付けられ部屋など、本人の状況・家族の思いを大切に居室作りとなっていた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	玄関や縁側、ウッドデッキなど段差のある部分もあるが、本人のわかる、出来ることを職員が把握して見守りに努めている。		